

1 次の文章を読んで、①～⑥に答えなさい。

文明と文化。同じような意味で使われることの多い言葉ですが、私は私なりの定義で混同しないように用いています。

人間が文明をつくるについては、いくつかの知的能力が人間に普遍的に潜在していたと考えるほかはありません。何かが何かの上にあるとか、下にあるといった先験的な感性の形式、個物が存在して一つ二つと数えられるという数の観念、感覚刺激をまとめて一つのかたちを見てとる想像力といった能力がそれです。

⑦ 人間には行動を繰り返す、そのなかでしだいに行動のかたちを一定の形式に整える能力があります。石を投げるにせよ、木を切るにせよ、身体の動きを一定の型にはめて、それを反復可能な慣習にしていく能力です。そうすれば行動の効率を高めることもできるし、その能力を他人に教育することもできます。じつはこれがすべて技術と礼儀作法と呼ばれる営みの原型になるもので、これもまた文明をつくる普遍的な人間の能力だといえます。

⑧ とくに行動の定式化から生まれた技術や、礼儀作法をさらに普遍化した法制度は、もともと教育可能な営みなので、文明として強力な伝播力をハツキしたにちがいありません。定式化はまた合理性の源泉とも考えられるので、いい方をかえれば、文明は合理的であるときに、その支配範囲をつねにカクチヨウするものと見ることもできます。

文明の話が長くなりましたが、では一方の文化とは何か。それは文明が人間の身についた姿である、と私は考えています。文化とは「身体化された文明」、あるいは逆に「意識化された習慣」ともいえるでしょう。文化がたんなる習慣と異なる点は、つねに一種の価値意識を含んでいることです。それゆえに、たんなる習慣には高いも低いもありませんが、文化には高い低いという質的な違いが生まれてくる。背後に文明という価値基準があり、それがいかに個人の身についているかが文化だからなのです。

⑨ わかりやすい例を一つあげましょう。ピアノや楽譜というものは西洋で生まれたものですが、まさにこれは文明のテンケイ例です。楽譜は頭のなかの秩序であり、ピアノは頭のなかの技術を物質化したもので、したがって急速に世界に広がりました。

しかし、社会のなかにピアノがある、楽譜があるということと、個人にとってピアノが弾けるといことは全く異なる現象でしょう。

ピアノが弾けるとはどういうことか。たんにマニュアルに従い、順を追って鍵盤を押すということではありません。キーの前に座ったら、もう指が動いてしまっているという状態になったとき、つまり身についた行動になったとき、真の意味でピアノが弾けるといえます。当然ながら、この行動には価値の上下があつて、上手な人もあれば、下手な人もあるわけです。

⑩ 文明の教育と文化の教育はいささか異なります。文明の教育が世界の果てまで容易に広がっていくのたいして、文化の教育は人間の身体能力に結びついているため、容易に平面的には広がらないのです。ピアノの弾ける人が集団的に増え、その集団が面をなして広がっていくことは考えられないでしょう。ただ、その代わりというべきか、文化は文明地図の距離を超えて突然に、一人の身体から他の人の身体へと伝わる場合があります。近年、中国や韓国から優れたピアニストが輩出していますが、彼らの育った環境はピアノにとつては異文明の世界でした。しかし、そうした環境にあつても、一人の個人が懸命に練習することで、文化としてのピアノを身につけることができたのです。

⑪ 湯を沸かして茶を点てて飲む。このごく日常的な行為が、茶の湯ではまずいったん手順に分解されて定式化されます。帛紗を捌き、茶碗を拭うといった、すべての動作が作法として図式化される。しかし、茶の世界でよくいわれることですが、手順が人の目に見えるようではまだ上達したとはいえない。水の流れのように、自然に見えるまで練習を重ねなければならぬ。いいかえれば、第二の習慣となつたときに、

文化としての茶の湯が成り立つのです。

したがって、文化の教育は非常に難しいともいえるし、しかし一人一人の個人が自分の責任と努力によって習得できる不思議なものだともいえます。(出典 山崎正和「文明としての教育」)

① —の部分②、④、⑥を漢字に直して楷書で書きなさい。

② ⑦に入ることをばとして最も適当なのは、(1)～(4)のどれですか。

(1) つまり (2) さらに (3) たとえば (4) しかし

③ 「とくに……なのです」とあるが、「技術」や「法制度」がなぜ「教育可能な営み」だといえるのか。文章中のことはを用いて五十

字以内で書きなさい。

④ 「わかりやすい例」とは、何をいうための例か。その内容を説明したものとして最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

(1) 文化とは文明が身体化された状態であり、価値の高低がある。良質な文化は、背後に文明という高い価値基準を持つている。

(2) 技術が物質化された文明は、個人の能力と無関係に急速に広がる。

(3) 優れた文明の多くは西洋で生まれ、教育によって世界に広まる。

⑤ 「身に……なつた」とあるが、このことを……部以降の文章中ではどのように述べているか。十字以内で抜き出して書きなさい。

⑥ 「文明の……異なります」とあるが、筆者は「文明の教育」と「文化の教育」がどのように違うと考えているのか。なぜその違いが生じるのかがわかるように、九十字以内で書きなさい。

2

次の文章を読んで、①～⑤に答えなさい。

(A) 「梅の香」は、王朝和歌では、「春」の季節感を象徴するものです。人はいさ心もしらずふるさととは花ぞ昔の香にほひける (『古今集』紀 貫之)

などの名作がいくつもこつています。しかし奈良朝以前の歌を集めている『万葉集』では、梅の花は愛され歌われてはいるものの、香りについて歌つたものはほとんどない、といわれています。その梅も、雪にまがう「白さ」を歌つたものが多く、中国から移入された梅は、花の清らかさがまず観賞の対象となり、香りを歌うにはまだ少し時間が要つたようです。

やがて王朝の四季に欠かすことのできないほどに愛好されるようになると、花のうつくしさもさることながら、花の香りが人々の関心を集めはじめました。『源氏物語』では、梅の花の香りは枚挙にいとまのないほど登場しますが、光源氏が梅の枝を手にして、紫上に見せながら、花といはば、かくこそ匂はまほしけれな。

① というところがあります。へ花という以上は、このくらい①といつて、ついでに桜の花に香りのないのを惜しがっている場面です。当時の人にとっては「花の香」といえば、ほとんどまちがいがなく「梅」をさしているくらいで、梅と香りとはい切り離せないのです。

『源氏物語』には白梅も紅梅も登場して、雪の残る早春の風景を、いっそう情趣あふれるものにしていきます。ただ、②梅の方が香りが強いと思われていたようで、

園にはほへる紅の、色に取られて、香なむ、白き梅には劣れるといふめるを、いとかしこく、とり並べても咲きけるかな。

③ ……ふつう、④梅は色の美しさに負けてしまつて、香りは⑤梅になわなないものだといふけれど、園に咲いたというこの④梅は、ほんとうに立派に、色も香も兼ね備えて咲いたものだね」と言わせています。いずれにしても、『古今集』に、

(B) 春の夜の闇はあやなし梅の花色こそみえね香やはかくるると詠まれた優艶な世界は、「香り」なくしては生まれて来ませんでした。闇のなかにほのかに感じられる春のいぶき、濃厚ななかにどこか凛とした清純さを失わない梅の花の香は、王朝人の心の核を作り出す大きなモメントとなりました。(出典 尾崎左永子「源氏の薫り」)

(注) 王朝——平安朝のこと モメント——物事の本質的な要素

① —の部分②、④、⑤の漢字の読みを書きなさい。

- ② (A)の和歌に一か所だけ意味の切れ目を入れるとしたら、どこが最も適当か。切れ目の直後の一語を書きなさい。
- ③ ①に入ることをばとして最も適当なのは、(1)〜(4)のどれですか。
- (1) 匂わないのがよいね (2) 匂わなくてもいいのに
(3) 匂うものなんだね (4) 匂ってほしいものだ
- ④ ㊶〜㊸には「白」か「紅」かが入る。「白」の入るのは、㊶〜㊸のどれですか。すべて書きなさい。
- ⑤ (B)の歌について、筆者は「梅の花」の何を観賞の対象にして詠んでいると考えているか。『万葉集』の歌との違いにふれながら、文章中のことばを用いて書きなさい。

3

次の文章を読んで、①〜⑥に答えなさい。

夏の終わりのことだった。

私は小さなバッグに着替えだけを詰めて一泊だけの旅に出た。私の年中行事のひとつだった。その年の旅は、会津若松への旅だった。ある小さな宿が目的で、囲炉裏端で食事をすることができるといふ、いまだき珍しい宿だった。

私は子供の頃、囲炉裏端で食事をした思い出を持っている。建て替える前の母の実家の古い家に囲炉裏があったのだ。

母の実家に遊びに行く楽しみは、祖父や祖母、叔父や叔母、いとこたちと大人数で囲炉裏を囲んで食べる賑やかな食事だった。ものすごいごちそうが出たということはないのだが、炭火や、自在鉤にぶら下がった鉄瓶の湯気や、銘々のお膳といった演出や笑い声があふれる囲炉裏端での食事が大好きだった。

久し振りに囲炉裏端で食事をとってみたくなり、会津若松への旅となったのである。

街を散策し、風呂に入るとすぐに食事時間となり、私は大きな囲炉裏のひとつに案内された。囲炉裏には炭火がほんわりとおきていて、裏い出の中の囲炉裏そのものだった。

笑顔の女将さんが串刺しにした岩魚を運んできて、炭火からほどよく離して灰の中に刺したその時、すっかり忘れていた記憶がまざまざと蘇り、女将さんの艶やかな手が、祖母のしわだらけのあたたかな手とだぶって見えたのだ。

私が六年生の夏のことだった。母の実家に遊びに行くことになり、私は祖父の好物のヤマメを釣ってお土産として持つていこうと決めた。釣りは祖父が教えてくれた。いっぱい釣って腕前が上がったことを祖父に自慢したかった。

が、朝から午後までかかって、釣れたのはたった二匹だった。それも小さなヤマメだった。小さなやつが一匹では格好が悪いとがっかりし、持つていくのをやめようとした。せつかくじいちゃんのために釣ったのだからと母が持つていくことを勧めた。私は絶対に嫌だといひ張った。だからそのヤマメはてっきり家の冷蔵庫に入っているものと思っていたのだ。

ところが、母と一緒に祖父の家にいくと、母はどこかに隠し持つてきたその小さなヤマメを祖父に差し出してしまったのだ。一日かけて一匹だけ釣ってきたと、いつてほしくないことを母はいつた。私は逆上した。持つてきちゃだめだといつたのにと母をなじつた。

その時だった。

「おい、炭をおこせ」

祖父が祖母にぼそりといつた。

「はいはい」

祖母がうれしそうにニコニコと笑って立ち上がった。

夏の間、祖父の家の囲炉裏は使われていなかった。大きな板が被せてあり、それが食卓になっていた。

「そうか。じいちゃんのために釣つてきてくれたのか」

叔父が笑って被せてある板を外した。

「囲炉裏で炭をおこして焼こうつていうの？ 時間かかるわよ。一匹だけだしガスコンロで焼けば？」

と母がいつた。

「いい。炭で焼く」

祖父が厳しい顔をして母を見た。

「健がじいちゃんのために釣つてきてくれたんだからな、最高においしく焼いて食べないとな」

叔父がボンと私の頭を手をおいた。

そのとたんに、私はポロポロと涙をこぼしてしまった。うれしかったし、一匹だけしか釣ることができなかったことが悔しくて、その入り混じった感情を抑えることができなくなつてしまったのだ。

囲炉裏の炭がおきて、祖母が串刺しにしたヤマメを灰に突き刺して炭火にかざした。

そのしわだらけの手が、宿の女将さんの艶やかな手にだぶつて見えしまったのだ。

祖父が焼きあがつたヤマメを頬張り、コップ酒を飲んで、

「うまいぞ」

と私に笑つた笑顔も思い浮かんだ。

私は焼きあがつた岩魚を食べた。炭火で焼いた岩魚はともうまかつた。冷や酒を飲んだ。たつた一匹の、小さなヤマメを大事にしてくれた母と祖父と祖母と叔父に感謝して、もう一口飲んだ。

(注) おきていて——(炭などの火が)赤々と燃えていて (出典 川上健一「囲炉裏旅」)

- ① 「六年生の夏」の回想の始まりと終わりの部分には、旅で見たものと六年生の記憶の中のものとの重なる部分が見えたことが描かれている。それは何と何か。文章中のことばを用いてそれぞれ十字で書きなさい。
- ② 「母をなじつた」とあるが、なぜ「私」は母を「なじつた」のか。それまでの経緯をふまえてわかりやすく説明しなさい。

- ③ 「いい。炭で焼く」という返事に表れた祖父の気持ちを説明したものと最も適当なのは、(1)〜(4)のうちではどれですか。

(1) 泣きながら反抗する「私」がいじらしくて、何とかその場を取り繕おうとしたのに、また口を出されてうんざりしている。

(2) せつかく釣つてきたヤマメだから炭で焼いて「私」と一緒に食べようとしているのに、横槍を入れられて腹に据えかねている。

(3) 祖父である自分への思いと子どもなりの面子を察し、母親を制してヤマメを大切に扱う形で、「私」に伝えてやりたいと思つている。

(4) 炭で焼いておいしく食べようという粋な計らいを理解しない母親がわが娘ながら情けなくて、「私」をかわいそうに思つている。

- ④ 「私は……こぼしてしまつた」とあるが、このときの「私」の気持ちの説明したものとして最も適当なのは、(1)〜(4)のうちではどれですか。

(1) 大事にされたうれしさに、自分への齒がゆさをも制御できずにいる。

(2) 慈しみへの感謝と、母に反発したことへの後悔が錯綜している。

(3) 周囲の愛情に面映ゆさを感じつつも、強い喜びを抑えられずにいる。

(4) 労られた喜びと、母の理不尽な仕打ちへの憤りで混乱している。

- ⑤ 「たつた一匹の……感謝して」とあるが、このとき筆者は当時を思い出し、それぞれの人物についてどのように振り返っているのか。その説明として適当でないのは、(1)〜(4)のうちではどれですか。

(1) 母は、祖父への「私」の思いを汲んで、「私」が嫌がるのを知りつつヤマメを持つていき、「私」の苦心を伝えてくれた。

(2) 祖父は、「私」の気持ちを理解して、夏なのに囲炉裏の用意をさせヤマメを焼かせて食べ、「うまいぞ」と笑つてくれた。

(3) 祖母は、「私」の祖父への思いと祖父の「私」への思いをあたたく受け止め、炭をおこしてヤマメを焼いてくれた。

(4) 叔父は、何も言わないが、子どもっぽく駄々をこねる「私」をたしなめるような素振りや、「私」への愛情を表してくれた。

- ⑥ この文章の表現について説明したものとして最も適当なのは、(1)〜(4)のうちではどれですか。

(1) 祖母への感謝の気持ちや尊敬語を効果的に用いて表されている。

(2) さまざまな人物の視点からヤマメを巡る心の葛藤が描かれている。

(3) 囲炉裏を巡る回想が重層的に描かれて文章に奥行きを与えている。

(4) カタカナ表記を多用することで当時の「私」の幼さを強調している。